

## 親を生涯発達の観点から捉える試み（その4）

### —— 家族の個性と親の発達 ——

# Parental development from the viewpoint of life span development (Part 4) : individuality of family and parental development

林 昭 志

Hayashi Shoji

#### 要 旨

本研究ではまずこれまでの親と家族の発達の研究を概観した。次に親と家族の発達に関する用語を整理した。次に家族の成員の増加と対人関係の複雑化について考察した。次に家族の個性を現す用語として家族性と家族史と家族差について述べた。次に生涯発達の視点から親と家族を支援する必要性を述べた。最後に両親を対象とした調査を実施し、家族の個性に関することや家族の発達に伴う子育ての問題の変化などを分析した。

キーワード：親、家族、生涯発達、家族差、支援

#### 1. 親と家族の発達の研究の概観

私（著者）のこれまでの親や家族の生涯発達の研究には次のようなものがある。

まず林（2005）はエリクソンの生涯発達理論の観点から子どもや親が生涯にわたって発達していく過程について述べた。親の発達は子どもの発達と深く関係しあっており相互作用していることが考えられた。

次に林（2006）では出生順位によるきょうだいの性格の違いなどから親の子育ての発達がみられることを指摘した。つまり長子には親は不安や心配が高く、その結果、慎重で控えめな長子的な性格が形成されるし、次子には親はより自信を持って臨めるので、快活で甘えん坊な次子的な生活が形成される。また親の発達を示す用語を解説した。

さらに林（2007）では大人と子どもの発達の違いを考察しながら、親の発達の特徴を考察し

ようとした。また親の発達権について述べた。また家族の機能について述べた。さらに調査結果から、子どもの人数が2人の場合は子どもの人数が1人の場合と比べて親の疲労感が高いことが推察された。

以上の研究から結果をまとめると、親子への支援は、親と子の双方が発達する権利を保障するために子どもとその家族の発達や権利を視野に入れて、人間の生涯発達の視点に立っていくことが必要ということである。

また親の何が変わるのか、何が発達するのかということに関しては人格と認知の2つの側面が挙げられてきた。しかし人格と認知が変化すれば行動も変化すると考えられる。そこでここでは人格と認知と行動の3つの側面を挙げた。表ではこれらの研究結果をもとにして発達の内容をまとめた。

表1 親の何が発達するのか

人格的側面	忍耐力、責任感、親性、養護性、生産性など
認知的側面	ものの見方（子どもの立場から物事を見る）、考え方の柔軟性、周囲への配慮など
行動的側面	子どもへの献身的行動、子ども中心の生活スタイルの行動など

## 2. 親と家族の発達に関する用語

親に関する用語（概念）には様々なものがある。

従来、親の性質を表す用語としては母性や父性がしばしば使われてきた。しかし最近では中性的な親性という用語が登場してきた。それは子育ては母親だけが担うものではないという考え方の広がりがある背景にある。

また養護性や生産性（エリクソンの用語）という用語がある。養護性や生産性は親性に関連している。親の性質として養護性や生産性が必要である。親性の中には養護性や生産性が含まれていると考える。

また親には親権がある。親権は子どもに対する親の権利である。また監護権がある。監護権は親が子どもを育てる権利である。

また親には親として発達する権利がある。同様に家族には家族として発達する権利がある。子どもが生涯にわたり発達する権利があるのと同様に、親もまた生涯にわたり発達する権利がある。

特に子育て家族の成員は子どもや親の発達の仕方に影響を与える存在である。子育て家族の成員は家族の発達に大きな役割を果たしている。このような理由から子育て家族の成員もまた健全に発達する必要がある、発達権があると考えられる。

ここで親と家族の発達に関する用語を表のようにまとめた。

表2 親に関する用語

母	性	母親としての性質。
父	性	父親としての性質。
親	性	親としての性質。（中性的な用語として登場した。）
養 護	性	幼いもの、弱いものを養い保護しようとする態度や技能。
生 産	性	次世代を育てて社会に有益なものを作り出す性質。（エリクソンの用語）
親	権	親の子どもに対する権利。
監 護	権	子どもを養育する権利。
親の発達権		親として生涯にわたり発達する権利。
家族の発達権		家族として生涯にわたり発達する権利。

### 3. 家族の成員の増加と対人関係の複雑化

家族の成員が増えるにつれて家族関係はどのように変化するのだろうか。ここでは子どもの誕生による家族内の人間関係（対人関係）の複雑化について述べる。

まず第1子誕生と成長により家族関係は質的にかつ劇的に変わる。夫婦が親になって親として発達を始める。

家族の成員が1人ずつ増えるにつれて対人関係の線は2, 3, 4, 5本というように増える（表参照）。

第1子誕生から第2子誕生における家族のメンバーの増加は1人でも対人関係的な複雑さは3本から3本増えて6本になり2倍になるのである。

第2子誕生から第3子誕生においては6本が10本になって4本の増加であり2倍にはならない。

第3子誕生から第4子誕生においては10本が15本になるので5本の増加であり1.5倍になるだけである。

第4子誕生から第5子誕生においては15本が21本になるので6本の増加であり1.4倍になるだけである。

このように第1子の誕生が最も対人関係の増加率が高く、その後に子どもが誕生しても増加率はどんどん低くなる一方なのである。

このようなことから考察すると子育て支援を必要としているのはまず第1子が誕生した家庭である。初めての幼い子どもに対してどのように対処していけばよいのかわからないという問題を抱える家族である。

次に第2子の誕生した家族である。第2子が誕生すると子育ての負担が倍増する。しかもきょうだい喧嘩などのきょうだい関係の問題に取り組まなければならない。このような理由から第2子の誕生した家族は3人家族とは異なった子育て支援を必要とする。

表3 子どもの増加と対人関係の線の増加率

家族の出来事の例	家族の人数	対人関係の線（それぞれの家族の成員をすべて結んだ線）	線の増加率
夫婦の誕生	2人	1本	—
第1子誕生	3人	3本 = 1 + 2	3倍
第2子誕生	4人	6本 = 1 + 2 + 3	2倍
第3子誕生	5人	10本 = 1 + 2 + 3 + 4	1.7倍
第4子誕生	6人	15本 = 1 + 2 + 3 + 4 + 5	1.5倍
第5子誕生	7人	21本 = 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6	1.4倍

#### 4. 家族の個性～家族性と家族史と家族差

上記のようにこれまでは一般的な家族の姿を想定していた。しかし国民性、民族性、県民性、あるいは個性というものと同様に家族性というものが想定されてもよい。

家族性という用語は家族が原因である疾患の名称（家族性～症のように）に使用されている。

しかしここでいう家族性とはその家族であるがゆえに持っている特徴である。ある家族に固有の特徴である。他の家族との違いを示す性質である。例えば親子が似ていることや外見や行動、性格、価値観の類似などが含まれる。

このある家族に固有の特徴はその家族の発展的变化と重なる。つまり特定の家族はその家族に固有の家族史を持つ。家族史とはその家族の歴史のことで、その家族に固有のものである。こうした家族性や家族史は家族の個性に関わっている。家族性とは家族の個性といってよい。ただしここでの家族史や家族性は家系的に何代にもわたり続くものでなく、ここでは子育て支援との関わりから、主に親を中心とした1代限りの親と家族の歴史や個性について扱いたい。したがって親個人の生涯発達の観点から見ていくことのできる家族の個性である。

ところで発達心理学者のピアジェの認知発達段階説は特定の個人の特徴ではなく、一般的な平均的な発達の特徴に関する説である。一般的な発達理論に対して個々の個人によって異なる発達の過程があるが、これを個人差という。

これと同様に家族性や家族史は個人差に対する「家族差」のようなものである。つまり家族同士の違いである。この家族差も個人差と同様にある能力の獲得が早いことや遅いことに対して良い悪いという価値判断をすべきものではない。

子育て支援における個別の対応は個々の家族に応じて援助することが求められるもので、ケースバイケースのようになる。子育て支援は家族差に応じて対応が異なるものであるため、家族性や家族史といった家族差を考慮に入れる必要がある。個々の家族の状況の把握をもとにして対応を考えていくからである。

もちろんどの家族も状況は似たようなもので変わらない部分が多いということはある。しかし同じように見えても家族同士には細かな違いがある。

また状況が多く家族とは異なる家族がある。例えば特別な支援を必要とする家族である。

このような家族はいわゆる一般的な家族との違いが目立って、共通点が見えにくい。

まとめると家族を捉えるときにはどのような共通点と相違点があるのかをしっかりと見ていくことである。家族には様々な違いがあつて、共通点からのみ見ていくことはできない。同様に家族同士には共通点もあり家族差からのみ見ていくこともできない。いずれにしろ家族同士の違いを家族の個性として捉えていくことは有益ではないか。

表4 家族の個性に関する用語

家族性	ある家族の独自の特徴。例えば親子が似ていること、外見・行動・性格の類似、習慣・生活様式・価値観の類似などが含まれる。
家族史	その家族の独自の歴史のこと。例えば家族の成員の変化、出来事などが含まれる。
家族差	ある家族と別の家族の個性の違いのこと。

## 5. 子育て家族の発達における一般的問題

次に子育て家族の発達の途上で起こる問題を述べる。ただし家族にはすでに述べたように家族差があり以下の内容はすべての家族に当てはまるものではない。

### 子どもの妊娠と誕生に伴う問題

家族が増えるということは家族にとっては大きな変化である。特に子どもが誕生することは親のこれまでの生活スタイルを大きく変えることになる。母親が依然として子育ての中心的存在である現在では母親が出産を機に仕事を辞めることも多い。父親にとっても家庭での過ごし方には大きな変化がある。

子どもが健常な場合でも子育ては大変なものなのに、障害を持っていた場合は障害の程度により親の負担は計り知れないものになる。

### 子どもが第1反抗期になる時期の問題

子どもが幼児期になり、親からの自立をはかるようになる。その表れとしての反抗である。

エリクソンによれば幼児期は自律性や自立性の獲得が発達課題である。自律性や自立性は自分で働きかければ必ず反応が返ってくるというような有能感のようなもので、自分で積極的に動いて色々なことができるという実感である。例えば子どもは親とあそんだりするときに楽しさを自分で作り出そうとする。この自律性や自立性の獲得に失敗すると自分のことを恥じたり、世界に対して疑いを感じてしまったり、自分自身に対して罪悪感を持ってしまう。つまり自分は何もできなくて恥ずかしいのだとか、世界のことは疑わしいのだ、というような実感である。だから自分から進んで色々なことに取り組めるような機会が必要である。しかも子どもは自立しようとしているのだから、大人は見守る姿勢が必要である。

しかし一方で親は子どもをしつけなくてはならない。基本的な生活習慣が身につくようにはたらきかけなくてはならないが、大変なことも多い。しかも子どもは親に反抗しながら育っていくこともある。しかし家事・仕事に忙しい親にとっては子どもに反抗されてはたまらなくなることも多い。親には気持ちの余裕が必要であり、支援が必要である。反抗期は親にとって

大変な時期であるが、反抗期によって子どもは健全に発達するのだから、それを受け入れていくことが必要である。発達の過程は相互作用の過程だから、子どもの自立を求める反抗に対する親の対応の結果が発達となる。相互作用というものは対話のやりとりだけでなく、親から子への期待感を持ったまなざしから始まるやりとりも含まれている。

#### 子どもが学力をつけていく時期の問題

子どもが大きくなり小学校へ通うようになることは、親にとっては嬉しくもあり同時に不安でもある。幼稚園・保育園のときとの違いは学習が進んでいくということである。学校の勉強についていけるのかという不安がある。子どもにとってもこの時期はエリクソンによれば勤勉性の獲得が発達課題であり、勤勉性の獲得に失敗すれば劣等感をもってしまうことになる。だから学校教育を受けている子どもに対しては勤勉性を持てるように励ましていくことが必要になる。

#### 子どもが思春期（第2反抗期）になる時期の問題

子どもが大きくなり、大人に近づいている時期である。ここでも子どもは大人からの自立をはかり反抗することがある。子どもが親から独立していくためにはこのような行動も必要なのかもしれない。このような時期はいわゆる狭義の子育て支援の範疇ではない。しかし子どもと親の生涯の発達の観点からの支援が求められる。

また進学に伴う経済的負担も大きくなる時期である。

### **6. 生涯発達の視点に立つとは**

発達は大人になって終了するものではなく人の生涯にわたって続くものであるというのが生涯発達の考え方である。それは高齢期になっても発達するものがあるという考え方であり、経済的で効率的な能力の獲得のみを発達として認めていく考え方とは異なっている。つまり身体の完成とともに発達が完成するとは考えず、高齢期においても発達が続くとする。高齢期においてはこれまで価値があると思われてきた能力を喪失することで新たに得ることができる能力があると考えることができる。

この生涯発達の過程は人が誕生してから乳児—幼児—児童—青年—成人—中年—高齢者—死という長期的なものである。こうした生涯の発達への見通しを持つことが生涯発達の視点である。

### **7. 子育て支援から家族支援・親支援へ～乳幼児対象から生涯発達対象へ**

子育ては親の生涯に渡って続くものなのに子育て支援は主に乳幼児期で終了してしまう。乳幼児を対象とした支援と児童・生徒を対象とした支援が連続していないのである。

家族と親の生涯を支援の対象とする必要がある。親と家族の生涯発達の権利が広く認められなければならない。

従来の子育て支援は乳幼児期の家庭を対象としたものだった。しかし今後は子どものいるすべての家庭を生涯発達の観点から援助する必要がある。

## 8. 両親を対象とした調査の試み

### 1) 問題

本研究では親子の類似や他の家族との違いをどのように意識しているかという点をたずねた。また子どもの成長につれての変化をたずねた。

また本研究は父母の両方を対象とした。今回もまたサンプル数が少なく、今後の課題がサンプル数の問題として残されているが、本研究でも親の研究の試みとして結果を報告することにする。

### 2) 方法

本研究においても身近な保護者に依頼して自由記述式のアンケート用紙を配布し回収した。

#### ① 質問項目

質問項目は林（2005、2006、2007）を参考にして作成した。質問項目は3種類に分けられる。

第1は「親子で似ていることが多いと思いますか。それはどんな点ですか。」「親子または家族で行動の仕方が似ていることが多いと思いますか。それはどんな点ですか。」「自分の家族に他の家族とは違うところがあるとすればどんなところだと思いますか。」という親子や家族の類似性、他の家族との相違性についての項目である。

第2は「子どもが今よりも小さい頃にはどんなことで困ったりしましたか。」「ここ数ヶ月くらいで子どもについて困っていることは何ですか。」「子どもの成長につれて、困っていることや悩んでいることが変化しましたか。」「子どもの成長につれて、家族の生活スタイルが変わりましたか。」という子どもの成長につれての悩みや問題の変化についての質問項目である。

第3は「親として子どもの成長に満足していますか。」「子育てにおいて今後はどのような問題がありますか。」という子どもの成長の満足感と子育ての展望についての項目である。

#### ② 調査協力者

調査協力者は父母のペアとした。（母のみで父のアンケートが回収できなかった組も含めた。）

フェイスシートにおいて子どもの人数および年齢、そして家族が3世代家族か核家族か、その他かを尋ねた。これらの項目に対して未記入もあった。

合計7組（父母の両方が回答したものが5組。母のみ回答したものが2組）。子どもの人数が1人が1組。子どもの人数が2人が4組。子どもの人数が3人以上が2組。2世代家族（核家族）が5組。3世代家族が1組。不明が1組。

すべての家庭に6歳未満の子どもがいた。2歳未満の子どもがいる家庭は4組あった。3歳以上5歳未満の子どもがいる家庭は4組あった。6歳以上の子どもがいる家庭は3組あった。この点で前回までの調査とは多少異なり、子どもの年齢が高くなったといえ

る。このことは家族の歴史や家族差を捉える調査には適していることだと考えられる。なぜなら家族の歴史が作られてきているからである。

### 3) 結果と考察

総じて父親の回答は短くて少なく、母親の回答が量的に多く、詳しかった。具体的内容についての夫婦同士の回答はあまり一致していないように思われた。

#### ① 親子や家族の類似性、他の家族との相違性について

親子が似ていると思うかどうかという点に関しては、似ている点が「多いと思う」という意味の回答がいくつもあった。具体的にどのような点が似ているかということについては、話し方・ことば・口調、行動、性格、目つき、笑い方、行動のテンポ、怒り方などが挙げられていた。このことから似ている点は話し方・行動・性格・感情表現を中心にして捉えられていると思われる。また父親でも似ているという回答が多くあり、子育ての中心を担っていると思われる母親だけが子どもとの類似性を感じているわけではないと推察された。このように親子が似ているという実感を両親が持っていることが示唆された。

次に親子または家族で行動の仕方が似ていることが多いと思うかどうかという点に関しては、様々な回答が挙げられた。具体的には日常生活の中でしばしばみられる行動上の特徴が挙げられた。特に行動や性格に関係するマイナス面での類似性を回答しているものが多かった。

このことより子育てをしている親は子どものマイナス面に注目しやすいという特徴を持っていると考えられる。子どもを育てていくには褒めて認めることも不可欠ではあるが、それと同様にしつけていくことが必要である。こうしたしつけは大変なことであるので子どもを育てていく大変さが表れていると思われる。

次に自分の家族に他の家族とは違うところがあるとすればどんなところかという点に関しては、家族構成の違い、父親の仕事の違い、外出先の違いなどが挙げられた。これらの他には“特にないと思う”という意味の回答が多かった。本研究では家族史や家族差を捉えることを目的としているが、多くの親が自分の家族は他の家族とは違うという点をときには意識していることがあるということは伺えた。つまり自分たちの家族を他とは違う独自のものとして捉えているという可能性が推察できた。

#### ② 子どもの成長につれての悩みや問題の変化について

子どもが今よりも小さい頃にはどんなことで困ったりしましたかという項目への回答と、ここ数ヶ月くらいで子どもについて困っていることへの回答との間の違いが親の子育ての問題の変化ということになる。

子どもが小さい頃に困ったこととして健康面では食の細さが挙げられ、行動面では反抗的なこと・わがままなこと・勝手な行動・友だちとのけんかなどが挙げられた。

ここ数ヶ月くらいで子どもについて困っていることへの回答としては、強い意志表示



への対応・反抗的なこと・きょうだいをいじめること・言葉遣いなどが挙げられた。

子どもの成長につれて困っていることや悩んでいることの変化に対しては、変化したという回答が多くみられた。具体的には、小さいころは発育面が順調かどうかなどであったが、友だちとの関わりへと変化したという意味の回答があった。小さいころは家庭内の子ども自身だけのことであるが、幼稚園・保育園・学校などへ行く年齢になると友だちと上手にあそべるかなどへと変化するようである。

夫婦の間でも一方は変化したと以为ていても他方は変化していないと以为ているという回答もあったが、夫婦で一致した回答もあった。

子どもの成長につれて家族の生活スタイルが変わったかという点に関しては、変化したという回答が多かった。特に母親では大きく変化したという回答が多かった。父親では変わらないという回答もあった。どのような変化があったかという点では、生活時間の変化（入浴・就寝・朝食などが早くなった）、休日の過ごし方の変化（外食や旅行を控える、休日は公園に行くなど）などが挙げられた。

このように子どもの誕生は親にとって大きな生活上の変化を伴うものである。生活スタイルの変化が子どもの成長とともに続いていくのである。

今回の調査ではいわゆる反抗期において親が子育てを困難に感じている様子が伺えた。ただし今回の調査では子どもが第1反抗期にエリクソンのいうような自律性や自立性、自発性などが子どもの内側にどのように育っているかを明らかにしていくことはできなかったと思われる。こうした問題は今後の課題である。また家族構成別の分析なども今後の課題である。

### ③ 子どもの成長の満足感と子育ての展望について

親として子どもの成長に満足していますかという点に関しては、基本的には満足しているという意味の回答が多かったようである。満足していない部分もあるが、まずまずである、しかも日々の関わりに忙しいし、まだこれから先のこともあるので、そちらの方が忙しい、ということであろうか。またこれまでの子どもとの関わりで反省することが多いという回答もあった。

子育てにおいて今後はどのような問題がありますかという点に関しては、やはり金銭面での問題、住居（子ども部屋）のことが挙げられた。また友達と仲良くできるか、学校での子どもの変化、思春期での対応、なども挙げられた。その他には情報や選択肢が多い中で振り回されないか、が挙げられた。

このように親と家族の問題は親と家族の生涯の発達過程とともに展開していく。したがって親や家族に対して生涯発達の観点からの支援が必要とされている。

文献

- 林 昭志 2005 親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み 上田女子短期大学紀要 第28号 pp.11-18.
- 林 昭志 2006 親を生涯発達の観点から捉える試み —— 乳幼児期の親の発達について —— 上田女子短期大学紀要 第29号 pp.1-9.
- 林 昭志 2007 親を生涯発達の観点から捉える試み(その3) —— 親の発達権と家族の発達 —— 上田女子短期大学紀要 第30号 pp.19-28.
- エリクソン,E.H. 仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会 I みすず書房